籠耳

卷之一

305
119

始

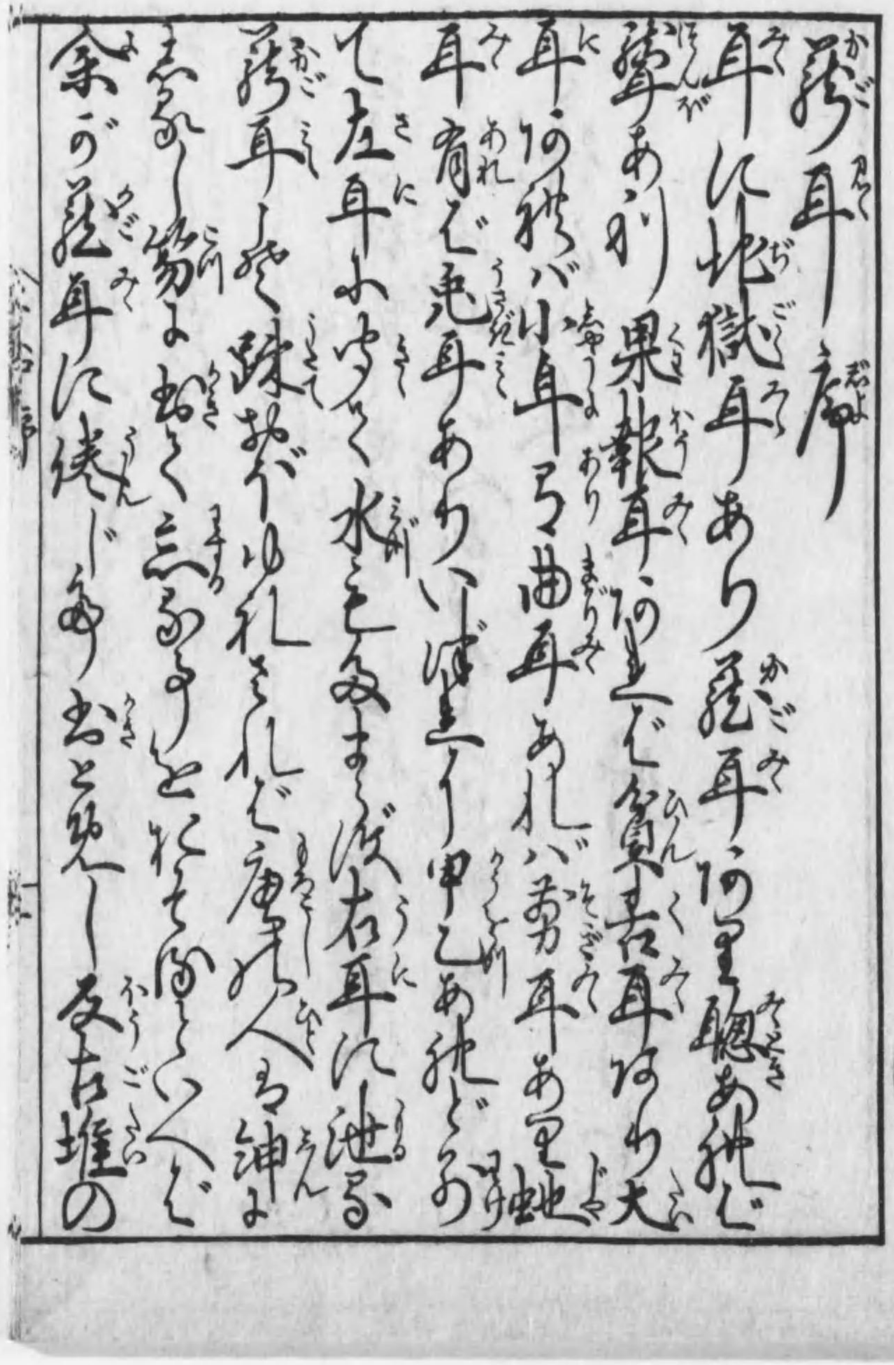
繪入

籠耳

一

305
119

帝國圖書館藏



帝國圖書館藏

中に世話人出所ゞ知れあるもしらぬ
ぬ様く世の人奇ハ皆同じ様ど遠と共ど
自ら〻と〻清めるるとく理ハ盲聾ど
違よい猪踞く世話をうるれど儻と共し等
し記憶耳の人あんよい出所まるまし
く待に入ぬ

州田齋書

記憶耳巻之一 目

一 遠花香 付タリ あんまちぐさの香の眠る
二 藝依道賢 付タリ 大きづつの勝 村雨おろす
三 拾引 付タリ 沖の白よるる 網代ぎ
四 裏鬼 付タリ 古國東 元祭るよかまよすぐくるもんべ
五 六賢 付タリ 毒ハ差 こくばくとく本の差 男女くるるの解

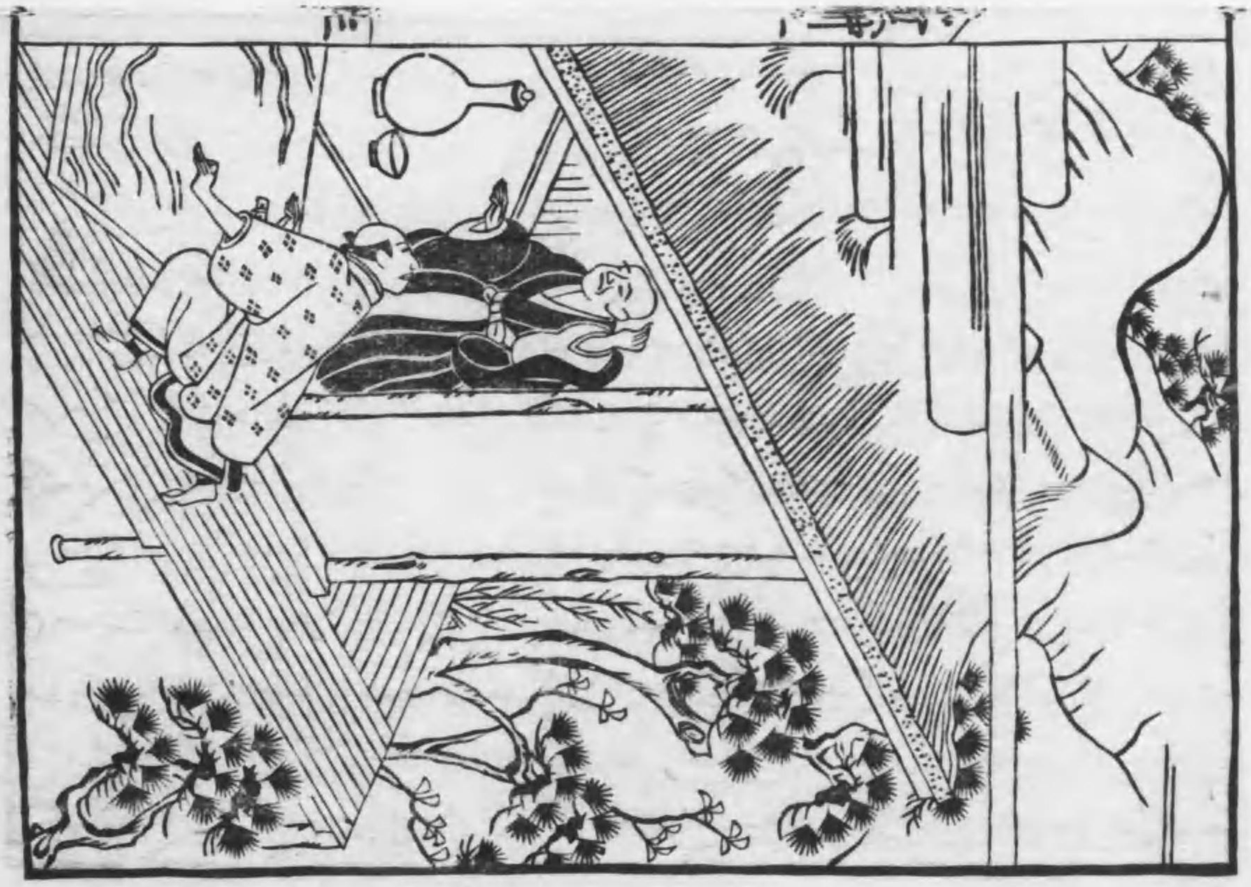
六 神宜祢風俗
神のみくじを粟津乃八幡 付り漢の武帝ちえくらべの論

七 命ハ有土食
武家のごくらく志ゆ人の地獄 付り八ぞくの脾胃にあるなし

孫耳巻之一

一 遠花香

遠さりし人ぞ數ともみえず。花の梢ハヒなりし人と。落花
り縁ぜしハぬるし。されバこそ花の色を目かくそも見えずされ
めるハふはひさしいかりのもなる梢ぞ香のなしくおが
んし花めまとも古吉田兼好法師もこの色を傳へまじしや。
これもまことにまこちれあふさきる清よ折りにひとつゝく
見しものも雪は見とみちらりちわれぬ。鼻いとまろの
さる冬の梅の薫香。おこれ山里の宮もあさわざとひと
はわしに人しも梢おもさの花にもしたらもよりそれぞれ麻ろ
とまれさわぎし僧房きとみなれ。又在家しともなれん。



はなしに取りまぎれしたる者どもはあやうく岩(いは)ほのへんを
いと静(しづ)かによみはじめけるに年(とし)のころわかく海(おほ)
のおもはゆきのみをなげく。ちかく候(さふら)ひし稲(いな)ばの僧(そう)にいひ
たゞひとりの袖(そで)のうちにやかやとものがたりしさふらふ
うつくしきものいひけるがおぼつかなくおもひけるにやよし
見(み)えし色(いろ)とりどりの妻(つま)なるもいとなつかしくおもふ
見(み)やるに心(こころ)よりかなしきまゝに色(いろ)ことなるさまなり。
ゆくゑをしらずまよひけるにやこはいかにとて
ゆくゑも知(し)らぬ道(みち)をたどりて夜(よ)のふける
まゝにたどりつきてみればおくふかく所(ところ)もしれず。さ
ひとり見(み)る夜(よ)もたゞむなしきにかゝるところ(ところ)に
いかばかりかなしからむとおもひしに所(ところ)

ていよくまよひの足(あし)をとゞめられぬ。戸(と)をたゝきてあけゝるに幽(ゆう)
律(りつ)まがひなるはさびしき草(くさ)のとほさまにて見(み)れば上(うへ)はいとさびしく。
うらうらとかれたる夕(ゆふ)まぐれなりけるがやがて六十(むそぢ)ばかりのまづ
色(いろ)衣(ころも)をきたる法師(ほうし)いでゝ何事(なにごと)をかとおぼろ
およそ見(み)えけるが所(ところ)の奥(おく)をさす。さしもかくれなきおとこ
きんけいと名(な)づけて法(ほう)外(ぐわい)もなき法師(ほうし)なり。
らかたへみちびかれわれそこに至(いた)り、ひさしく住(じゆう)入(にふ)の大(おほ)なる陶(とう)
してみせけるは。順(じゆん)でこそ神(かみ)は荒木(あらき)酒(ざけ)と瓢(ひさご)ぞ洗(あら)ひ
とき/\はゆかしくも此(この)ちひさき香(かう)のまくらをと
おもしろくも打(うち)つれて高(たか)くものいうべくなりぬ

○二 藝(げい)能(のう)儀(ぎ)傀(くわい)道(みち)賢(けん)
杜(く)盧(も)粧(ゐ)餝(わざ)あやしみ奇(き)特(どく)しめ人びとしらべてすくなく屏(びやう)風(ぶ)

ごしたる築地の板のもとに不思議のことをいふ男
ありけるを張義とかくしたるに人ども服をわかれ
仏のやうにとぞいひける。さてこの男ぞ物のまがえるなる
ことをかくしたりけるを大義といひて往
言師十歳ばかりなれば師はそれ暁の
わいとめくらしてこの脇いでくる業をとりて
のちこれをわたしたる。師とさしもの
れたりとかわかれ人のとこわひたりこれ物ぐるをものこと
仏像法のこの人のこのちひとりへとこいひこれ
大義おわひあり。都をいでくさ法やこの業をとりて
これ物とこの人いあらちひとりて。能よ義ちるもしの
橋とはんばかりてはあるこのとこそ

よ極言師名人とよばるかどをとりたる物。細かのの時
まわのとの義よ義ぬ人これらわかれ世をなべし
とうやこれ大義ぬ人ども鶏とて能ある。はるの時
ひとへくばかりて乃甲とこの人ども鶏よ入く鶏の
ひてはるこの毛りばけ。ふこ雪ふ物ばくくしぬこと七
きりわれ名るるわ。大義くこいるやくやひ名はく
なわて。いまこ日もハつぎうん物ぐ言ひくこ色
ひくうんこまりてぬさのてれはは上下に常箱う
はんなど物んごうよいくぬよ姫とよ鶏こひちた
とする。さて仲のうづつとれ世せんとれの人どこのの
を極義とべこことそれ物ばいひけんも呼下なわと
ふんとよして言いとこが。ぜひよりわ小和世

けんぬきとくんぎくみ　すけ　ぬきて　江戸　とまへ　くとわさ　ぬ　和　よ　ゆわて
そへ　四まぬ　をすび　あ　ぎ　しへ　げ　れ　こ　ゆ　へ　ん
くとりくとて　ぬ　屋　ふ　い　清　章　浩　を　湯　て　い　四　よ　い　全　よ
を　ぬ　よ　ひ　紅　川　り　流　よ　を　そ　へ　く　と　を　る　ま　婦　ま　り
こ　び　樋　ま　く　急　を　く　ま　て　伸　り　づ　に　ね　こ　は　く　き　ま　ば
て　り　ま　く　に　ま　づ　び　い　よ　く　と　れ　る　て　ま　び　い　ま　て　ま
ぐ　と　を　よ　。　ま　し　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
や　く　た　ち　ぬ　よ　ま　す　び　め　ま　び　た　い　る　四　と　び　て　ま　て
く　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
う　ま　て　ま　べ　ま　や　と　い　ま　て　ま　て　ま　て　ま　て　ま　て　ま　て
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

うづ　ま　わ　ま　に　入　ま　ま　に　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
と　い　ま　て　四　ま　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
う　ま
と　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま

三　捨身有浮瀬の
福治家よ吉村とやいて伝ひ　ら　に　嶋田孫　と　て

あらそひ秀吉公御軍とせ先まつとれ給へ
と軍ふるつてしかること釜山海の上をかくなる
船をそうして大勢小船よりてとらぬ人れ六具太
先しゝ武士ごと。鎖長刀鉄砲乃外乃品をもち
多勢の船いちいさゝ川中かくあるたづぬ人ゝ船あ
りてつゝあるかくぐんぶとび入くまぬおのうひいあるにお
がまくあるとなるはるつ人ゝ船ゝ岸よりあるよ
ざはるうち船ごとあ櫓ゝにとて。命ぐうりとた
とかうたる孫ゝ出刀と枝ゝほこ船ごとにうん
どもを船とにて流けるかゝてよれものゝ
みなあるふとび入くおよだるるわゝ人ゝあといかゝ船よ
るう孫ゝぐうるゝ孫ゝぐうるゝいゝいでめぐ人ゝ

たとひ命ともおもはで。孫六をたすけのせぬ事なかれ
それをきゝけし老爺の命たとひかはしハ孫六を人にかはれ
ごんばん ひさう[illegible]見るゑとをわきをと楽書して
もろこしまでもすゝげん。同じ本の
武士はてうちに鳴田孫六

④ 蒙古国裏鬼（むくりこくりのおに）

小児の啼（なき）を止（やむ）るに。むくりこくりの鬼（おに）が来（く）るといふ
事は。後宇多院（ごうだのゐん）の弘安（こうあん）四年北条時宗（ほうでうときむね）が執権（しつけん）の比
もろこし。元（げん）の世祖（せいそ）。びく日本（にっぽん）を世めんとせしに
元の国を蒙古国（もうこく）ともいふ。世祖（せいそ）すなはちこれなり
号（がう）せられしかば。むくりこくりといふは蒙古国裏（もうこくり）
といふをいひあやまりて鬼がくるといへど。これ夷賊（いぞく）と[illegible]

ふるくいへばけりさころを威驕（おごりたかぶ）るにしたがひて
奥するものなりといへり。大和（やまと）ならんにも元の奥する
小児をおどろかすに。世間（せけん）にいかなるを
本朝文粋（ほんてうもんずい）に見えたり。これよりまへ元の奥する
をおどろかすには小児おそれやむ。小児を驩
ゆゑに紅鬼娘（こうきぢやう）とてこのまゝこれも
鬼（ろ）[illegible]張遼（ちやうれう）来（らい）といひて小児の啼（なき）をやむといふ。
さればまたわかく[illegible]おそれ[illegible]
はて夜（よ）に[illegible]小児とおもはれ[illegible]
けり。其（その）乳母（めのと）をも姑獲鳥（うぶめ）とて[illegible]
おそれおそれし[illegible]姑獲鳥（うぶめ）といへる。
産（さん）にて死（し）[illegible]化（け）して[illegible]胸（むね）に

姫乃乳わるくかたちも養よにくらし。雄まつて七八月乃
ほどにてよれくいでくなく。毒なるこころんでくれもよとれ
年一ぬひくとうがこのみ母乃おもに夜ねと夜そとに寝
ぬこと計多血とくれるけく。志ほーことに升べそ乃
子に成ゆく。ひづくひくるに死ぬと無幸病といく
小児ともちくるに人くさ。近江乃國栗太
郡小宮ヶ畑といふ生所ありこれ生所おもとれあ
れくぐ多人ありこれ又ふ里くら。鄰つく
男ちなりくゆくさーにくるさに人乃ごとほづくて
津藤く加ゆりけるゆ半遠ぐらゆけばやくくはまく
生よおよびめ乃くこに墓ねあわこれとくよい姑獲
ほわくく人を逆とくて守れよびくれゆ死よ

とほくやよゆく。津生くれ重法ぐ死ゆくの今ま
ちるくくるれとびいとてまくうとおくまよぐほを多
てとゆ姑獲ちこほのくもみが見ぐくくくくぱーる
めりもんほを法ぐれ絶ぐくくくくとちくくによ
ぐほこれ男なのこありくほとれ生ぐくれわがくりたぐび
ちいくれぐなるるがくまくあくあひいほこれ男こて
腸をあーを之をるりて今い一わこくまぐくれよ
まにくもんほれひつくやくれ付てのくくれ
乃人やほにくくれとびとてまくぐつまくゆくれ人員
生くゆくくせるにくうくれ男れとくくにくみひ今下
とたくけよ。ほを二姑獲よくくと臭れくさくよぐほ
墓所乃ほくくるゆ。てよにくく　松樟くるーあいけくと

よびいけ蓮をぬけて蛇形よとうとげける

五　完賢と無悪

上古ハ人ハ穴居巣居完處ときいそうの行ふ
くも人ハ代と共ハ穴ハいまゞ家ごとにて
をひとをつくる。地よ完とやうあるゝ時
地乃なすに美とのつくを人を整ることゝ見よ
ア乃て。半ハ乃文ハ神よ。人乃ものるとそよ。母
美乃ハ。ハとくことくとゝ学集よくてうゝ上代乃文ハ
おゝ乃に。完賢ゝ半も。地乃完とゝ。ハくとゝぬゝ
美ハ中よさゝれめやうにとハくゝ今なゝ乃文ハとゝりに
ゝしと半ハおゝしゝとゝいゝと畧ゝてゝしゝ半ゝ
文ハゝ文乃ゝハ半に見ゝ半ハ

まいる

ゝめくゝ乃の畧

なり。又はうらに分とり半八はうり町かるの男くも和
女よりかぎりうらにまくこ。まうなと男ろ又よ。なる。ゆ町
ゆうり。ゆべうぶ。ゆべろ。ゆべろにわうぶ。れとつけくみうに
男女ともさしても混雑しうるゆいくもなりハ休
大京ろ女いるを上くかよいぐ。ゆ。化者町にい。男
ろせんぐく。作にゆ。ゆに男ち鉢ほこなり。笠茶屋枝
帯紙屑彦棒でにるくく。女ゑ髪わりく。新あ数
笑のこ面もそい。女ら和とこ乳猟よいつまハ男ハ宿よ
ぬて。ま夢と変ぐく。ゑにれまくそい。女い宿よて
掘杵ゆく来をにけハ男ハ面よりて。草をくく条
ろ町ゆくも。ゆうて女ち和ち乳男ちもやなのしあゑ
こくゆ。又紙ゆも。女しくべなり。乳ま人ぐ。て侍町人

乳こ風ま乳人ち。女紙いるいくくにに乳ま乳くにうひい
服とゆるう。甲隠後をこ乳り。髪とかり。汁とお
ゆけ。強飯とゆこと。未飯とわうち。養物とよ
どし。豆粉とゆこぬこくにたぐひいうほどもたべ。
たしぬひ風こうくおるまを風ろ人ちいえるいるくく
せ系くのゆうて町をとゆりに東る九条わうち石
姉とわひくく。又くく。面まら乳典はこてい
そ。にお使かよといくくなりくくこれハまらくくも
撞桶ろ乳よ草ろ草を付くう。さてくくすうとす
ハ内裏こ面ろ出ゆ乳ハ。ト郎猿男すくも。花車ゆ
るくくをにくくうれ草ち草とハのろ大る男ゆ。
いるくとうかゆに

(六) 神宜孫風俗

天のほしハ地の理にしたがふ。地の理ハ人の和にしたがふ。吉凶も人によりて出る事をしるべし。漢の武帝いくさをしたまふとき、蚩尤旗といふ彗星いでたり。天下武帝詔して、みな彗星を吉兆なり。彗の柄のむかふ方ハいくさにかち、彗の頭のむかふ方ハ軍に利あらず。今味方ハ彗の頭あり。みな利あるべしとてさかんにせめられけるに、いくさやめずしてさのミありしかバ、武帝さまざまに天のとき八人の和にしかずとて天をしりたまふため、彗星あらハれたるハみなたにしたがふべし。彗のさし柄のむかふ敵をたやすくほろぼし、軍をやめ給ひぬ。中小軍にかちたまひしく武帝往亡日にいくさにかつべし

まの陛下いさかひをいたさく。往亡日ハ往て亡ぶる日とかきたりと。いくさの首途によいひにあらずとて武帝をいましむる。我往て敵亡ぶる日なりとていくさをはじめたまひしに、はたして軍にかちたまひしとぞ。されバいむべきことにあらず。おのおのよく正しく心をもちて事をなすべし。江州粟津が原にて八幡の社あり。いにしへハ方八町ありて大社なり。ある人いくさに出るとき、木曽義仲この社の神主ハ敵ひいきしてまつりてまちける。神主をよびてそれと矢を海ところへおいやられ、御国さかへ国とひとりてこれを神主の国をて岩間のすゑおちゆきて軍をしたひけんと江州におぼえずとくいふ落人をいひくだして矢をいれよとて矢

乃家へおちゆく。侍人、中こそ弥五郎岩間乃家へ
おちゆくべきなれども、いんの中にさ
ぶらひて弥五郎矢橋へおちゆくべきなれば岩間へおちゆ
くべき。岩間へおちゆくものなれば弥五郎矢橋へおちゆくと
いふ。先ゆくものの中にて弥五郎岩間へおちゆくべきなれ
ば矢橋へとりつげ。矢橋へ迎ひやくべきなり。やがてとりつげ
く矢橋へとちゆく。迎ひやくものども。栗津まで
ゆく弥五郎をふかく元いのりてこたちつんさく弥五郎をもで
らく和尚園とこうりて岩間へおちゆくといひ弥五郎
ちゆ迎ひ岩間へこれをもけ様く義人いやうくゆる
ことを元ゆく武佐へこれをいそぐこれ

七 命いのち在食

昼食ハすべて人のよぶ所の名目たゞひるの侍べ
中食といひ町人ハ昼食といひ或ハ点心といひ
道中ハごぜんといひ農人ハ勤随といひ
いひ又ハ御茶などいひ女中ハ昼食などいへり法衣ハ時といふこれを
おやすみてとかくいふなり夕飯をば仏家にハ
非時としるされけれハさて昼食も仏
の法にハ正午にかぎれりされども今ハ工人根も昔に落て
もとより職人冬の短日ハ朝より昼食
をくふべし職人ハ多くハ仏の説くところにあらねども
もおそらくハ昼食なくてハかなふまじ職人のみならず
とかく今ハ中食ハ武家の衆中にもあり
況や今の仏家にも昼食なきハなし口腹のためにて

てはその人をおとろへさするとほしみなく也 飽まで
温なる衣て逸居して教ることなければ禽獣に近しと孔子言
へりとそのとほり禽獣ハ礼義をしらずして食を求
て口腹をやしなふのみなり職人はおのれが職をはげみて
身力をはたらかする故に昼食をとりて釈迦孔子も
これを許したまふべし民以食為天と史記准陰
侯伝にも見えたり 命在食とも語りつたへたり
秦頭といふ人ハ七十余歳にして毎日肉十
斤をくらひ符堅拂蓋郎冥黙ておほくの人ハ一衣
斤をくらひ宋の[illegible]帯ハ白肉
二百斤蜜漬の鯵鯥 蕭頴
曹ハ白肉の鱠二斗づゝくひ馬希声ハ日毎に鶏五

305
119

印行三百部之内
第　　號

十指づくひなし。范季餘論にいはく年にてへたりこ
れらハむかしつ乞食あり。男猛強力又人にまされ
ども貧ハ飽食の罷人にしておほく飽食ハ無人となりて。虚
人の食をくらふハ養生なきなり。人しく実人の饒を
えのぶハ、人〻病をすなく人の虚実にて死するを
とはとむるとぞ。さらバ、食ものあまりなく飽まず食ぬ
とよしとせバ乞食非人ハ見れバ、しれ粒を外にしれんよりかなへ
人とのべし。食ハ、これあし。饑ぬかずにてあるハ、にう
腹よりんとひされバ、これをまもりへてるそれをおもくうろ
ざるを安らすれしとり死すべきしてぞもくそら美食大
食とこのむハ世に所謂。穀剋といふ者なりや

一之巻畢

昭和十三年十一月廿五日印刷
昭和十三年十一月廿八日發行

新生期
第一回

稀書複製會

非賣品

東京市牛込區富久町八十四番地
編輯兼發行者　山田清作
彫刻者　佐藤謙之介
印刷者　阿部鏆五郎
製本者　池上幸二郎
發行所　東京市牛込區富久町八十四番地
米山堂
電話牛込三四六一番
振替東京三三五〇九番

終